

# 特別支援学校教員の専門性の拡大に向けた取り組み

—子どもの動作の見立てシートの活用—

## Expanding the expertise of teachers at special needs schools

土田菜穂・古谷槇子

Naho Tsuchida, Makiko Furuya

立命館大学・東京医療学院大学

Ritsumeikan University・University of Tokyo Health Sciences

Key words : 特別支援学校、教員の専門性、自立活動

### I. 問題と目的

特別支援学校では、子どもたちの障害の重度化・重複化・多様化が進み、教育的なニーズに対応するため、教員の高い専門性が求められている。2005年の中央教育審議会の答申では、外部の専門家の活用の必要性が示され、学校現場での外部専門家の導入が進んでいる。外部専門家のPT（理学療法士）の役割は、子どもの姿勢や動作に関する指導・支援へのアドバイスを提供することである。教員と外部専門家が対等な立場であってこそ、教員による子どもたちへの指導の適切な評価や改善につながる。そのために、教員と外部専門家が同じ視点で子どもの変化が確認できるツールの確立が望ましい。

本研究目的は、教員の子ども動作（座る・歩く・階段上り下り）の見立て（実態把握と目標設定）に着目して、教員自身が動作を見立てることを可能とするサポートを検討することとした。まず、対象となる教員に対して、アンケートを実施して身体の学習に関する要望や困りを把握した。さらに、動作の見立てを補助するシートを作成して（理学療法士である第2著者）、そのシートの効果を検証するとともに、そのシートをもとに専門家のアドバイスを実践に活かすための教員と専門家のやりとりの在り方を検討した。

### II. 方法

対象となる教員：特別支援学校教員A、B、C（小学部、中学部、高等部より、身体の学習を担当する教員を1名ずつ選出、学校長と各教員への研究協力の承諾を得て開始した）。教員A、B、Cは、教員歴が平均7.7年で、過去にも身体の学習を担当する経験があった。

標的行動：教員A、B、Cによるシート導入後の専門家への子どもの動作に関する質問行動やコメントの推移とした。

手続き：はじめに、事前アンケートおよび聞き取りを実施した。アンケートの内容は、身体の学習を担当する経験年数や子どもの動作に関する見立ての際に活用している情報、必要とするサポート、現在の困りなどであった。つぎに、対象となる教員1名ずつと、第1筆者および第2筆者が、シートの説明と子どもの動作の現状について

の話し合いを30分程度実施した。さらに、話し合いで、1か月間で子どもたちの動作を実際に観察しながらシートに記入することを確認し、質問やコメントがあれば専門家である第2筆者に相談できる方法を説明した。

### III. 結果&考察

アンケートおよび聞き取りによる結果は、3名とも身体の学習時の子ども動作の見立てにおいて、昨年度からの情報や外部専門家の巡回による助言、周りの教員からの助言、保護者からの聞き取りなど複数の情報をもとに実施していた。身体の学習時の子ども動作の見立てをするときに必要なサポートとして、専門家による巡回や相談会など専門的なアドバイスを挙げた。困りは、関節の可動域について専門家に確認してから実施したいなどの回答があった。対象となる教員は、様々な情報を取り入れて、身体の学習時の子ども動作の見立てをしているが、加えて専門家の助言や確かな根拠が必要と感じていることが分かった。これらをもと、対象となる教員の意見を加えながら、シートの改良を実施した。

シート導入後の一番の変化は、教員A、B、Cの質問行動やコメントの増加と内容の具体化である。教員A、B、Cは、シートをもとに、その語句や項目の内容にある高さや大きさの確認、専門家との話し合いをもとに具体的に取り組んで新たに疑問に感じたことなどの相談内容のやりとりが生まれた（表1は教員Bの結果抜粋）。シートを活用することで、教員と専門家が具体的に目標とする動作のイメージを共有できたことが要因の1つと考えられる。また、その指導・支援により子どもの動作が改善したという報告も得られた。これらの結果から、シートの活用によって、よりの確かな教員の指導・支援へとつながることが示唆された。

表1 教員Bによるシート導入後のやりとりの回数

	1週目	2週目	3週目	4週目
歩行器		〇〇		
立位台		〇	〇	〇
椅子	〇	〇	〇	〇

※各項目に関する質問やコメントの回数を〇で表示